

熱田神社の説明資料	
説明項目	説明内容
	この近くからは縄文時代の土器が発掘されるので、古くから集落はここにはあった。
熱田社の始まり	
言伝えでの創建時期	日本武尊の時代(西暦72年~113年)
	日本武尊(ヤマトタケル)が戸台の河原(大量の血で染まったので赤河原と呼ぶ)にて、この地方の災いの大蛇を退治し、この地に葬って小さな祠を作ったのが始まりと信じている。
形影	その後、尾張国の熱田神社の形影をお迎えし、産土神として祀った。尾張国熱田神社の3箇所より境内につながる道がある三方三ツ辻の配置(鳥居が3箇所にある)とした。
	その後、神明宮、八剣大明神を合祀する。
産土神(ウブスガミ)	生まれた土地を領有、守護する神で氏神様とは別と考えられる。
神明宮(シメイグウ)	伊勢信仰、天照皇大神など伊勢内宮・外宮を分霊した神
八剣大明神(ヤツルギダイミョウジン)	日本武尊の祭祀する剣系の神
確認出来る一番古い時期	南北朝(今より約680年)の時代
	南北朝の時代(1336年~1392年)南朝(吉野朝)従えた藤原成文卿「信濃のなる伊那てふ里の片辺にもめぐみあったの神の御柱」の歌より熱田社はこの時期には建立祀られていたことがわかる。
現在の熱田社本殿 大工棟梁	宝暦9年~13年(1759年~1763)の5年間で大改修 池上善八(本姓高見)
彫物師	溝口村 宮の久保生まれで、武蔵国妻沼村(埼玉県妻沼町)の宮大工林兵庫正清のもとで修行する。 関口文治郎有信とその弟子5人
色付け師(粉飾師)	池上善八は上州当時知り合いとなった関口文治郎に彫刻を依頼した。関口文治郎は東上州花輪在上田沢村(群馬県勢田郡黒保根村)生まれで、上州の左甚五郎とも言われた。 森田清吉
建築費・建築材料	武州久保村出身 現代の貨幣価値で推定5億円
寄付者	神社に係る資料によれば、村人147人の寄付だけによる。 この頃は三峰川の大水害や、はやり病で村人は大変苦しい時代であった、村人の熱田神社に寄せる厚い信仰心に頭が下がる。
建築材 ご神木と高麗神社(効カガシヤ)	境内で1番大きなご神木のケヤキ1本でまかなう。 この倒した樺の空洞から大蛇の骨が現れ大蛇伝説を信じている村人が、このご神木の根元に小さな祠を奉り蛇骨様(シヨツサマ)と呼んで無事の完成を願った。
	
	本殿北側の高麗神社
彩色材料 建築の記録	鉾石などを砕いた絵具(岩絵具)を接着材のニカワと混ぜて塗る 昭和5年、宗良親王の石碑と思われるものが発見されたので、目ぼしい家の古文書を調べている時、中山晶計氏宅に保存されていることが判った、詳細にわたって3冊に記録されている。

